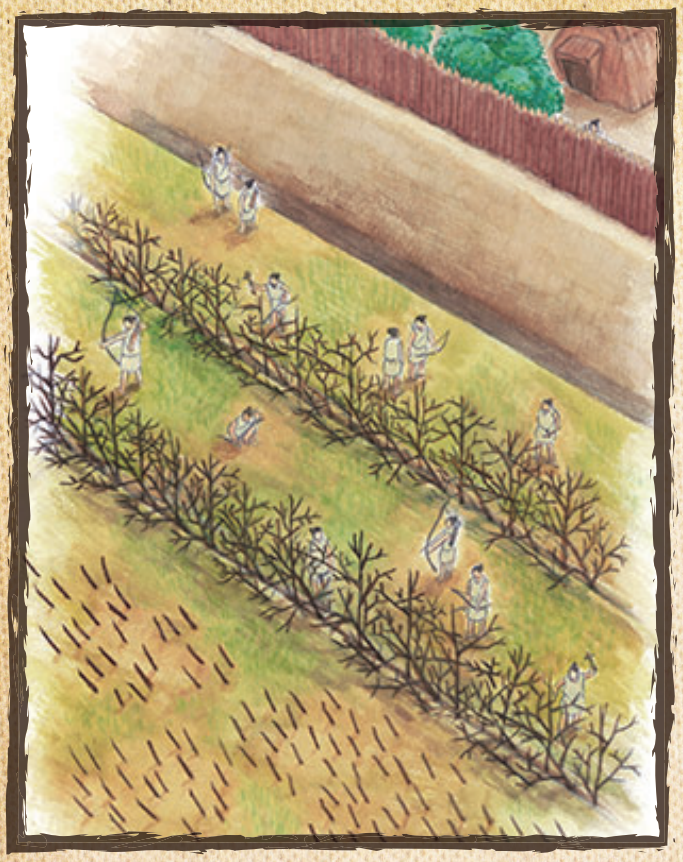


多重防御施設

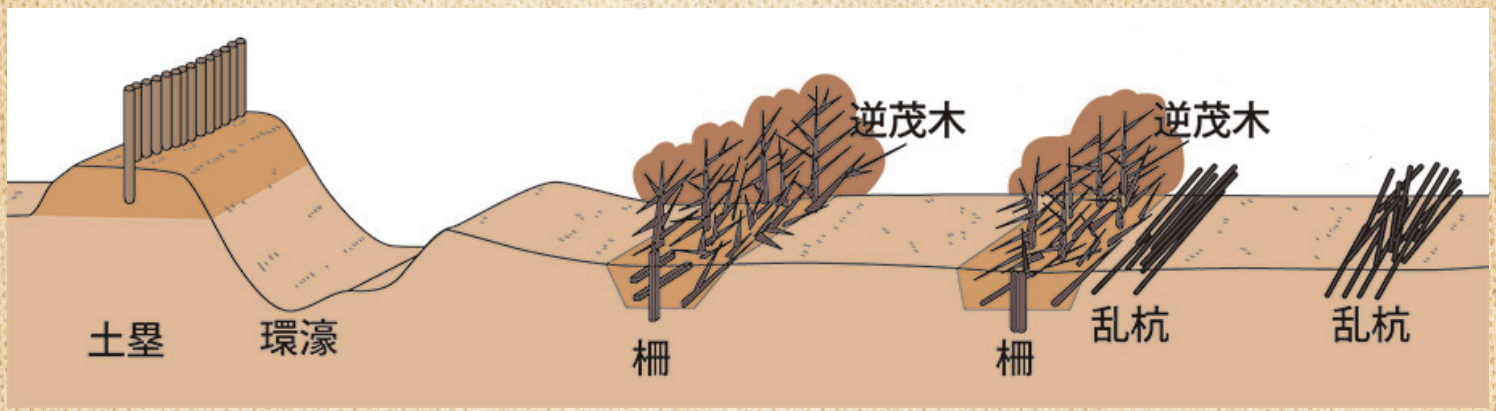
弥生時代中期

弥生時代は、集落間や地域をこえた争いが何度となく繰り返された時代でもあった。弥生文化の広がりとともに、戦いにそなえ堀をめぐらせた、環濠集落が各地に現れた。

朝日遺跡も環濠集落のひとつだが、ここではさらに強固な防御施設が発見されている。弥生時代中期の北居住域では、環濠と土塁が築かれ、その外側には、枝がついたままの木をからめた逆茂木、斜めに打ち込まれた乱杭など、何重ものバリケードがつくられていた。

全国でも初めて発見されたこれらの防御施設は、集落の城塞的な姿をうかがわせ、それまでの牧歌的な弥生時代のイメージを「戦乱の弥生時代」へと大きく変えていくことになった。

多重防御施設の構造



集落外からの侵入を阻むため、環濠の外側に設けられたバリケード。溝の中から枝が付いたままの木が幾重にも重なって出土している。溝の中に杭を打ち込み、縦木、横木、斜めに枝のついたままの木（逆茂木）をからませ、溝を埋め戻して固定する構造だったと考えられている。逆茂木の外側には、斜めに打ち込まれた乱杭がめぐっていた。

逆茂木

乱杭